

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33936

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12833

研究課題名（和文）「生の哲学」としてのハイデガー哲学包括的解釈の試み

研究課題名（英文）Comprehensive interpretation of Heidegger's philosophy as 'philosophy of life'

研究代表者

城田 純平（Shirota, Junpei）

人間環境大学・心理学部・講師

研究者番号：00816598

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、マルティン・ハイデガーによる思索の展開を「生」を鍵概念として包括的に捉えることを試みた。その結果、本研究では、次の点が明らかになった。まず、『存在と時間』の時期のハイデガーが生概念を使用しなくなったのは、伝統的な人間学に親和的なzoeの意味での生を回避しようという彼の意図によるものであり、むしろディルタイから継承したbiosの意味での生概念をハイデガーは『存在と時間』における現存在概念へと積極的に継承している。さらに、いわゆる後期ハイデガーにおいては、zoeの再解釈が行われ、これがphysis概念に近いものとされた上で、肯定的に捉えられている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においてはハイデガーの哲学を「生」を鍵概念として包括的に捉えることを試みてきた。その結果として、ハイデガー哲学が、伝統的な人間学とどのような距離をとってきたのかが明らかになり、またとりわけ後期ハイデガーの思索をzoeの哲学として捉えなおすことによって、zoe概念に対するハイデガーの評価の両面性という点から、ハイデガー哲学からいわゆる生命倫理や環境倫理の問題系へとアプローチするための展望が開かれた。biosを強調する立場とzoeを強調する立場の両側面が、特に後期ハイデガーにおいては矛盾なく統合されている点は、生命や環境の問題を考える上で特にユニークな点である。

研究成果の概要（英文）：We have attempted to provide a comprehensive view of the development of thought by Martin Heidegger by taking 'life' as a key concept. The following points became clear as a result: Heidegger's withdrawal from the use of the concept of life during the period of "Being and Time" was due to his intention to avoid life in the sense of zoe, which is familiar to traditional anthropology; rather, the concept of life in the sense of bios, which he had taken from Dilthey, was actively taken over by Heidegger in "Being and Time". Furthermore, in the late Heidegger, zoe is positively reinterpreted as something close to the concept of physis.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ハイデガー 生の哲学 哲学的人間学 ディルタイ シェーラー

1. 研究開始当初の背景

ハイデガー思想の生成過程を研究する多くの研究者にとって、主著『存在と時間』の時期には「現存在」でもって人間存在が表示されているものが、なぜその思想の生成期においては「生」によって表されていたのかということが、兼ねてからの疑問として共有されてきた。そして、初期フライブルク期のハイデガーがディルタイに積極的に言及していることも相俟って、初期ハイデガーによる「生の哲学」がディルタイの影響下において展開されたことも、ハイデガー研究の常識である。こうした常識から導き出される上の疑問に対する答えは、ハイデガーはディルタイに対して次第に批判的になっていったために「生の哲学」から離反したのではないかと、といった予想である。

しかし、いくつかのテキスト上の事実は、こういった予想に整合的ではない。例えば、『存在と時間』執筆の直前に行われた1925年の『カッセル講演』においては、『存在と時間』の最終盤に追いやられているディルタイ論が、むしろ講演の前半に配置され、その内容を展開する形で『存在と時間』の本論に相当する議論が行われている。つまり、ここではディルタイの「生の哲学」の発展として『存在と時間』の思想が開陳されているわけであり、してみれば、この時期のハイデガーは必ずしもディルタイ的な「生の哲学」に背を向けているとは言えそうにない。そこで申請者は、『存在と時間』においては生概念の使用が中止されているという事実を、ディルタイ批判とは別の文脈で適切に処理しつつ、ディルタイの「生の哲学」が『存在と時間』にまで継承されている可能性を探ることはできないかと考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

上述の通り、1927年に公刊された主著『存在と時間』においてハイデガーは、人間存在のことを「現存在」という独特の用語で言い表している。だが、このような用語法は、彼の思索の初期から採用されていたわけではない。現存在という語の上のような用法は、1922年の論文『アリストテレスの現象学的解釈』(いわゆる『ナトルブ報告』)において初めて見出されるようになる。そして、それから数年の間、人間存在に関するハイデガーの表現は定まらないままであり、1925年夏学期の講義『時間概念の歴史への序説』に至ってようやく『存在と時間』で採られている用語法が確立する。

他方、現存在という語が用いられるようになる以前は、1919年から1923年にかけてのいわゆる初期フライブルク時代を中心に、ハイデガーは人間存在を「生」という語で言い表している。その背景には、我々の日常的かつ具体的な生の諸相を、認識論的な問題設定によって損ねることなくありのままに捉えようという、この当時のハイデガーの問題意識が潜んでいる。そして、このように生を中心とする哲学を彼が構想するに至ったことには、ディルタイの「生の哲学」が色濃く影響しており、このことは、1920年夏学期の講義『直観と表現の現象学』におけるディルタイ論の充実ぶりからもうかがえる。

だが、それでは、このような用語法上の変遷の中で、初期ハイデガーにおける「生の哲学」は、すなわち、生概念を中心とする豊かな思索やその概念性はどのように処理されたのだろうか。現存在という形式的な語が用いられるようになる『存在と時間』の時期に至るまでの間にそれは切り捨てられてしまったのだろうか。また、1930年代半ば以降の後期思想においては、生概念に関する新たな展開が見られるのか。これらの点を、生から現存在へと至る人間存在を表すための概念の変遷に注目しつつ、ディルタイやシェーラーといった同時代の哲学者との思想交流にも注目して明らかにしていくことが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

上のような目的を達成するために、本研究では、1920年代を中心にハイデガーの講義録を広く渉猟し、彼の思想形成をテキストに即した内面的な仕方で明らかにしていくと共に、ディルタイやシェーラーの著作も同時進行的に読解していくことで、彼らとの思想的関係も含めてより立体的にハイデガー哲学の全体像を描き出すことを試みた。さらには、こうした古典的テキストの読解に加えて、ドイツとアメリカで現在続々と刊行されつつあるハイデガー関連の最新の論文や研究書の積極的な摂取も行った。

4. 研究成果

(1) 生概念の使用をハイデガーが取りやめた理由について、生概念の二重性ということ視野に入れつつ、これを整理すると、次のようになる。そもそも一般的に生という語には、ハイデガー自らが積極的に表示したい *bios* だけでなく、*zoe* のインプリケーションが含まれていたところを、この *zoe* が、1923年頃から彼が批判的に捉えるようになった伝統的な人間概念と密接な関係をもっているということが浮き彫りになったため、もはやこのように自分にとってアンビバレントな「生 (*Leben*)」なる概念を使用することは回避すべきであると考え、主著『存在と時間』の時期には、完全に現存在が生に取って代わって用いられるに至ったのである。

(2)ハイデガー研究においてしばしば指摘される、ディルタイに対するハイデガーの評価が否定的になっていったという点に関して、とくに『存在と時間』については、次のことを言うことができる。すなわち、「ディルタイの仕事に従事するために、ヨルクの精神を育む」という『存在と時間』のハイデガーの言葉は文字通りに受け止められるべきなのであって、同書第77節におけるハイデガーの議論は、単にディルタイよりもヨルクが優れているということを強調するためのものではなく、むしろ、ヨルクを媒介にしてディルタイにおける積極的な点を引き出すためのものであったと言える。ヨルクをハイデガーが評価したのは、ハイデガー自身、「歴史的なもの」を「存在的なもの」から際立たせようとする考えをヨルクと共有していたためであり、そして、このようにハイデガーとヨルクが「存在的なもの」と「歴史的なもの」の差異を強調するのは、「歴史的なもの」を追求するディルタイの「生の哲学」の基本姿勢に彼らが共鳴していたためである。そのため、まさしく、ディルタイの「生の哲学」の根本的なモチーフは、『存在と時間』におけるハイデガーの議論にまで響いていると言える。

(3)後期ハイデガーにおける zoe の再解釈について、同時期のハイデガーは zoe を、かつてのように「動物的」ないし「生物的」な生として捉えることを完全に否定し、むしろこれを「神々」に近いものとして再解釈している。そして、同講義においては、zoe と physis の近さが語られた上で、zoe の上のような意味は physis にも同様に当てはまるものとされ、physis もまた或る種の「立ち現われ」として解釈されることになるのであり、これは、後期ハイデガーにおいて繰り返される「存在の生起」という事態と重ね合わせて考えられていると見てよい。つまり、生概念に定位して言うならば、前期思想から後期思想への転回は、bios の哲学 から zoe の哲学 へ、と定式化されうる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 城田純平	4. 巻 38
2. 論文標題 ハイデガーにおける「生の哲学」の帰趨 「転換点」としての『存在と時間』第77節の再検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学と現代	6. 最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 城田純平
2. 発表標題 ハイデガーはディープエコロジーの擁護者か？ ハイデガーとシェーラーとの対比を糸口として
3. 学会等名 名古屋哲学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 城田純平
2. 発表標題 ハイデガーの芸術論と生概念の二重性
3. 学会等名 名古屋大学哲学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------